



TITLE:

## 第65回岐阜外科集談会

AUTHOR(S):

---

CITATION:

第65回岐阜外科集談会. 日本外科宝函 1974, 43(1): 97-99

ISSUE DATE:

1974-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/208000>

RIGHT:

## 第 65 回 岐 阜 外 科 集 談 会

日時：昭和47年 5 月 9 日 午後 5 時30分

場所：岐阜大学病院 新外来棟 4 階講堂

### 1. 急性小脳炎の統計的観察

岐大 第2外科

坂井 昇, 田中正雄, 山田 弘  
大熊晟夫, 坂田一記

当教室において過去13年間に急性小脳炎（急性小脳性失調）症例を、15才以下で12例と、極めて稀有と考えられた成人例 4 例の16症例経験した。年令は最低 3 才 2 ヶ月から最高44才で小児期症例の平均年令は約 7 才、性別は男子 7 例女子 5 例であった。感冒様の初発症状に引き続いて発病した例は 8 例、頭部外傷後に発症した例が 2 例あり、初発症状の多くは頭痛悪心嘔吐であり、失調症状が著明に出現するまで平均 4~6 月であった。入院時の神経学的所見では、全例で失調性歩行や運動失調を認めた他に言語障害、複視、対光反射消失、眼球振盪などであった。眼底や脳脊髄液、脳血管写、気脳写等で異常は認められず、virus の検索も試みたが特異な反応は証明しえなかった。全例が12~85日で全治を示し、退院後の追跡調査では、昭和47年 4 月現在、44才(♀)例を除いて全例に最高 8 年 2 ヶ月まで再発は認めていない。以上自験例16症例に併せて、文献的考察を加えて報告した。

### 2. 特異性食道拡張症の 1 例

岐大 第1外科

小野文瑛, 村瀬恭一, 後藤明彦

症例は、27才、男性で、主訴は、嚥下障害現病歴は、昭和45年12月頃より、嚥下障害を来し、一時、病状は軽快していたが、その後、悪化し、当科に来院した。

食道透視検査で、本症特有の拡張像、狭窄像を認め、手術は、左開胸で、食道下部狭窄部を中心に、前壁で、約 8 cm の縦切開による粘膜外筋切開術を施行し、術後経過は、良好であった。上記症例に、若干の文献的考察を加え報告した。

### 3. 教室における縦隔腫瘍の統計的観察

岐大 第1外科

馬場国男, 鈴木 剛, 馬場瑛逸  
広瀬光男

昭和30年より昭和47年 2 月までに教室で経験した縦隔腫瘍は、転移性 4 例を含め30例である。原発性腫瘍は前半12年間に12例、後半の 5 年余に14例であり、最近の症例数増加は著しい。原発性腫瘍26例は、奇形腫 6、胸腺腫瘍 6、神経性腫瘍 7、先天性嚢腫 3、リンパ性腫瘍 1、その他 3 例であった。年令は最年少は 1 年 3 ヶ月の女児で、最年長は60才男性であり、平均年令は 29.3才であった。性別発生頻度は男性12例、女性14例ではほぼ拮抗していた。組織的・臨床的に良性のものは17例、悪性のものは 9 例で35%にみられた。良性のものは死亡なく、悪性のもののうち 5 例で、全例の20%に達し、悪性のもののうち 1 例のみが腫瘍を完全に剔出できた。

### 4. Bochdalek Hernia の経験例

岐大 第2外科

堀部 廉, 佐治重豊, 国枝篤郎

我々は最近、乳幼児の Bochdalek hernia を経験した。患児は、9 ヶ月、体重7120g の女児で、これまで比較的健康であったが、8 ヶ月目の乳児検診にて、左胸部異常を指適され発見された。入院時発熱があり、軽い肺炎を思わせた。発熱は 3 日ほどで緩解したが、この頃よりやや呼吸数が増加し、5 日目突然呼吸停止、心停止となった。緊急手術にて、ヘルニア整復術を行ったにもかかわらず、心停止後、意識、呼吸の改善は認められず、64時間後死亡した。この症例にて、新生児、乳幼児を問わず、出来る限り早急に手術的治療を行なわねばならないという印象を持ち、又若干の考察を加え報告した。

### 5. Björk-Shiley 人工弁による

僧帽弁置換の 1 例について

国立療養所岐阜病院

浅野 靖, 小林君美, 井上律子  
加藤康夫, 清水慶彦, 松本守海

最近、我々は、Björk-Shiley 人工弁による僧帽弁置換の 1 例を経験し、良好な結果を得たので文献的考

察を加えて報告する。

患者：20才，女子，学生。

主訴：浮腫と全身倦怠感。

現病歴：昭和44年2月頃より，心悸亢進，呼吸困難を認め，昭和46年4月，心不全で本院入院，僧帽弁閉鎖不全症と診断された。1ヶ月の治療でその症状も改善し，以後外来治療を続けていたが，その後自覚症状の増悪，心陰影の拡大をきたしたので再度入院する。

検査所見：胸部レ線で心胸廓比は，0.62，肺血管陰影の増強，心尖部に Levine3/6～4/6の全収縮期雑音を認める。心電図は左室肥大，左室造影でⅡ度の逆流を認める。昭和47年4月12日，開心術を行なった。

僧帽弁は，後尖に著明な肥厚，菱縮を認める。人工弁としてBjörk-Shiley 弁27を使用した。

術後の経過は，良好である。

## 6. 肝膿瘍の胸腔内穿孔の1例について

松波病院外科

和田英一，松波英一，西 仁  
鬼束惇哉

38才，男子，約4ヶ月前から体動によって著明になる右季肋下部疼痛があり，赤沈の高度促進，白血球増多，貧血症状を呈し，開腹により肝硬変症と多発性肝膿瘍を認めた。保存的治療で一時的に軽快したが，肝膿瘍右胸腔に穿孔して膿胸となり，持続吸引するも手術後48日目に死亡した。

剖検上，肝硬変症に続発した胆管尖から多発性肝膿瘍が合併し，横隔膜を穿通し，右胸腔に穿孔して膿胸となったものであった。

## 7. 腎結核と誤診した腎盂腫瘍の1例

岐大 泌尿器科

野村恭博，田村公一，磯見和俊

症例：58才 ♂

主 訴：無症候性血尿

家族歴：既往歴：特記すべきものなし

現 症：初診1ヶ月前に無症候性肉眼的血尿をきたし当科入院，fever, lumbago, miction symptomには気づいていない。膀胱鏡で左尿管口から血尿を認め，IVPで左腎の造影を得られず，逆行性腎盂造影で腎盂部のfilling defect様像と辺縁不整のhydrocalyxを認めた。腎盂腫瘍が腎結核か判断できない様な像であったため，腎動脈造影を行った。その結果，tumorを疑せる所見をほとんど得られず，ついに腎結核，腎

盂尿管移行部狭窄，hydrocalyxと診断し，t-nephrectomyを施行した。術後，Arausi Aional cell carcinoma of the reval pelvisと確定したため，若干の考察を加えて発表した。

## 8. 尿管鑄型結石の1例

岐大 泌尿器科

清水保夫，西浦常雄，坂 義人  
波多野紘一

39才女子にみられた，左膿腎症を合併した尿管鑄型結石について報告した。患者は2ヶ月来反復して起す弛張性発熱を唯一の訴えとして来院した。

経皮的腎瘻術により排膿（培養にてE. coliを純培養）及び腎機能の改善をまって，尿管切石術を施行した。結石はUP-J直下に存在し， $4.9 \times 1.3 \times 1.0$ cm (3.3g)の巨大尿管結石で，膀胱側が太いこん棒状を呈し，比較的滑かな結石の下部が不整な表面を持つ結石に連続して一塊となっていた。

術後の経過，水腎症，腎機能の改善はきわめて良好で，感染も速かに消退した。

なお結石の成分については現在分析中である。

## 9. 尾仙部奇形腫の経験例

岐大 第2外科

〇名和 正，平田俊文，佐治董豊  
国枝篤郎

尾仙部奇形腫は尾仙部を中心に発生する胎児性の腫瘍であり，大半は新生児期にみられる極めて稀な疾患である。我々の教室でも17年間に悪性化を呈した1例を含む合計3例の本疾患を経験したので文献的考察を加えて報告する。

症例Ⅰ：〇井〇香 10日目 女児

生下時左臀部から尾仙部にかけて新生児頭大の腫瘤あり。尾骨を含めて全摘除。標本は700grで神経，骨，腸管上皮組織などからなる奇形腫で悪性所見なし，全治退院す。

症例Ⅱ：〇島〇子 3日目 女児

生下時すでに尾仙部に新生児頭大の腫瘤あり。尾骨を含めて全摘除。標本は400gr，脳神経，骨，脂肪組織などからなる奇形腫で悪性所見なし，術直後死亡。

症例Ⅲ：〇井〇也 2才。

腫瘍は尾仙部を中心に拡がった巨大な腫瘤であり，入院時すでに手術不能の状態であった。試験切除にて

胎児性癌であり、制癌剤を使用したのが6ヶ月後死亡した。剖検にて肺、肝、腎などへの転移を認めた。

## 10. 直腸悪性リンパ腫の1例

岐大 第1外科

松原長樹, 伊藤達次, 後藤明彦

最近我々は直腸に原発した悪性リンパ腫を1例経験したので報告した。患者は83才男子で、4年前より、裏急後重、血便を来しており、全身状態が悪くなり来

院した。腹部所見、注腸透視、直腸指診、血液諸検査等より、巨大直腸腫瘍の診断にて開腹した。

手術所見：直腸翻転部より肛門側へ位置する小手挙大の腫瘍を認めた。茎を翻転部より3×1cm大で直腸後壁に硬く連続していた。腫瘍摘除術、一次の人工肛門造設を施した。組織学的には、クロマチンに富む、胞体の少ない腫瘍細胞からなるリンパ肉腫であった。

以上直腸の悪性リンパ腫の1手術例を報告し併せて、文献的考察を行った。

# 第66回 岐 阜 外 科 集 談 会

日時：昭和47年10月17日 午後5時30分

場所：岐阜大学附属病院 新外来棟 4階講堂

## 1. Sinus pericranii(頭蓋骨膜洞)の1治験例

岐大 第2外科

細野芳男, 大熊晁夫, 山田 弘  
坂田一記

16才女子、7才の時右前額部を石にて叩打したが放置。11才の時より首の前屈、怒責により同部にクルミ大の腫瘤が生ずるのに気づく。入院時右前額部の皮膚瘢痕に一致して前屈、側臥位にて3×3×0.5cmの腫瘤を認め、立位、圧迫等により消失。頭部レ線像、PEG等により meningocele spuria traumaticaと診断し開頭術を施行。同部頭蓋骨に骨菲薄化と10数個の骨小孔を認め、頭蓋骨上の血液嚢は骨小孔及び硬膜の亀裂様小孔を介して上矢状洞と交通せる頭蓋骨膜洞であった。硬膜小孔を電気焼灼し、スポンゼルにて被覆し、骨弁外に認めた骨小孔には骨蠟を充填した。組織学的には、嚢は結合織性の壁と1部に一層の血管内皮を有していた。本邦において極めて少ない本症の1治験例を報告し、若干の文献的考按を加えた。

## 2. Preauricular cyst の1例

岐大 第2外科

堀部 廉, 佐治董豊, 国枝篤郎

我々は最近7才男子の Preauricular cyst を経験したので若干の考案を加えて報告した。

患者は右耳介前部の腫脹発赤を主訴として来院。検査にて右外耳道閉鎖を合併しており、尖症所見を認めていた。

手術にて、Preauricular cyst、又は、Preauricular fistula+epidermoid cystの感染があり、それが潰れ、Pseudo cystを形成したものと思われた。鰓原性奇形は、His以来多くの人々によって研究されているが、完全な意見の一致をみていない。Preauricular cystは第1鰓弓反心第2鰓弓の耳介結節の癒合不全によって発生する。かなりの高頻度を示し、尖症のある場合は尖症の消退をまって摘出されねばならない。

## 3. 縦隔ノイリノームの1例

羽島病院外科

関野昌宏, 小原真哉, 河村雄一

## 4. 胸腺嚢の1治験例

岐大 第1外科

鈴木 剛, 小野文英, 広瀬光男

症例は69才男子で、自覚症状なく某医にて胸部レ線上の異常陰影を指摘されて来院した。入院時血液一般検査に著変なく、胸部レ線検査にて、前上縦隔に約7cm径の境界明瞭な腫瘍陰影を認め、良性胸腺腫と診断、G.O.F全麻下に、左第4肋間にて開胸した。腫瘍は前上縦隔にあり、手拳大で薄い被膜におおわれた嚢腫であり、周囲とのゆ着もなく容易に剝離された。嚢腫は表面に一部脂肪織を含む非常に薄い被膜を有し、単房性で、内容は淡黄色透明であった。病理組織検査にて、胸腺リンパ上皮、Hassall小体を認め胸腺嚢腫と診断された。術後経過は良好であり、若干の文献的